

研 究 紀 要

(第67集一分冊)

生 徒 指 導 部 会

[全体講演]

「スマホ時代の生徒指導 ～ 生徒指導提要執筆者から… ～」

兵庫県立大学 環境人間学部 教授 竹内 和雄 …… 1

[第1分科会]

「学校生活アンケートの活用と改善から見る生徒指導について」

青森県立大間高等学校 田中 大基 …… 3

[第2分科会]

「本校における学校不適応生徒の状況とその対応について」

青森県立青森高等学校 成田 康生 …… 5

[第3分科会]

「八水クリーン大作戦」

青森県立八戸水産高等学校 大下 光広 …… 7

部 会 の 動 き …… 10

研 究 テ ー マ …… 11

紀要編集委員 三 上 雄 一 (青森県立青森北高等学校)

令 和 5 年 度

青 森 県 高 等 学 校 教 育 研 究 会

生徒指導部会

全体講演

「 スマホ時代の生徒指導 ～ 生徒指導提要執筆者から… ～ 」

講師 兵庫県立大学 環境人間学部 教授 竹 内 和 雄

1 生徒指導提要改訂とネット問題

現在、情報教育はネットを正しく使うための情報モラル教育から、ネットを賢く使うためのデジタル・シティズンシップ教育への転換期にある。その中で、令和4年12月に生徒指導提要が約10年ぶりに改訂された。ネットや携帯電話に関するページが15ページにわたって追記されたことから、文部科学省もネットに関する生徒指導に対して力を入れていることがわかる。

現在の小・中学校では携帯電話の教室への持ち込みを禁止している学校が多いが、10年後は小・中学校にスマホを持ち込むことが当たり前になり、教室でスマホを使う子どもたちを受け持つことになると予想される。

2 Society5.0の構想と現在地

2018年に総務省が「Society5.0＝超スマート社会」の実現を掲げてからわずか5年で、VR、自動運転、ドローンでの農業散布、キャッシュレス決済等多くの技術が普及している。当初、10年かかると考えられていた技術の実現が5年に早まったのは、新型コロナウイルス感染症の出現により、それらの技術の必要性が急激に高まったからである。一人一台端末によるGIGAスクール構想の実施が前倒しになったのもそのためである。

子どもたちにパソコンやタブレットを配布し、学校での積極的な活用を促している状況であるため、以前のようにスマホやネットの問題は親の責任であると押しつけることはできなくなってくる。

3 子どものネット利用

現在は0歳からネットを利用することが常識になっている(親が家事中にYouTubeなどを見せるため)。YouTubeは興味のある動画が次々に出てくるため、放送時間が決まっているテレビのような時間的制約がなく、絶え間ない長時間の使用が続く。

1990年頃から共働きの家庭が急激に増加し、専業主婦が減少しているが、それに伴って親の帰りを待つ子どものスマホ利用も増えている。そのように社会の仕組が変化したため、スマホを利用する子どもの責任については、親だけでなく、社会全体で考えていく必要がある。

4 子どものネットでのトラブル

最近の中学校では、暴力行為が軽微なものも含めて減少しているが、その分ネットの問題が増加している。小学校では、放課後のゲームのボイスチャットでのもめごとを翌日に学校に持ち込み、朝にケンカを起こすという問題が増加している。

子どもにネット使用についての常識がないという訳ではない。子ども同士がアプリで位置情報を共有することに躊躇がないなど、子どもと大人の常識が違うということを、教師は押さえておく必要がある。

5 不登校中学生の増加と進路の変化

高校生もスマホを扱うようになった平成24年以降、不登校の中学生の数は3万人増加している。以前は3年

生になると、内申点の不安から学校に戻る不登校の生徒が多かったが、現在は3年生になっても学校に戻らず、通信制の高校に進学し、不登校のまま中学校から高校の6年間を過ごす生徒も増えている。

N高やS高などの通信制の課程に進学する生徒数が増えた要因の一つに、コロナ禍で体育祭や文化祭などの学校行事に制限がかかり、生徒がリアルな学校生活を感じられなくなったことが挙げられる。学校行事などの学校生活の「リアルの良さ」をもっと出すべきである。ネット文化を逆に利用して、InstagramやTikTokなどのSNSで「リアルの良さ」を学校が発信していくのも一つのやり方である。

6 青森県の高校生の特徴

(1) 帰宅後にすること

青森県の高校生は、帰宅後にすることのうちおよそ80%がネット利用である。進学校の生徒や受験が迫る3年生においてもその数値に大きな変化はない。「自宅ではスマホの誘惑があるため勉強ができない＝自宅は勉強をする場でない」と考えるため、このような結果になると予想される。そのため、塾や学校、図書館、カフェなどが学習場所として活用されることが増えている。

(2) ネットの接続時間が4時間を超える高校生

ネットの接続時間が1日4時間(週30時間)を超えるとネット依存になりやすいというデータがある。青森県において、ネットの接続時間が4時間を超える高校生は全体の30%程度であり、学年が上がるに連れてその割合が高くなっている。その生徒は「朝食の欠食がある」、「12時より遅く寝る」、「よくイライラする」、「勉強に自信がない」と答える割合が高い。原因として、「朝食を食べさせない」、「夜に子どもに気になけない」、「勉強の悩みに答えてくれない」など家庭に問題があることが考えられる。

ネットの接続時間が1日4時間を超える高校生は、「ネットでケンカをする」、「ネットで課金をする」、「面識のない人とLINE等のSNSのやりとりをする」と答える割合も高くなる。しかし、面識がない人とのSNSでのやりとりに関しては、ネットの接続時間に関わらずほとんどの新生入が入学前に互いに連絡を取り合うことで経験している。

7 ネットの正しい使い方

ネットにはフェイクニュースや詐欺サイトなど、安全性や信頼性に欠ける情報が溢れている。生徒に対しては、「使わせないようにする」ではなく、実践を通して自分で調べる習慣や、情報の良し悪しを判断する能力(メディアリテラシー)が身に付くように指導していくことで正しい使い方ができるようになる。

さらに、#9110(警察相談専用電話)や188(消費生活センター)など困ったときの相談先を教えるおくことも大きなトラブルを防止するために有効である。

8 大人ができること

子どもたちがネットの悩みを相談する相手の中で教師の順位は低い。一方的に指導されたり、親や他の生徒に伝えられたりすることを子どもたちが恐れるためである。しかし、本当は教師に悩みを相談したいと思っている生徒は多い。いつでも相談に乗る姿勢でいること、個人的な感情で叱らない(暴走しない)こと、専門機関と連携をとって解決策を考えていくことなどが指導をする上で重要になる。

また、依存傾向の有無に関わらず、保護者や自分が決めたルールよりも友達や生徒会が決めたルールに従う子どもの割合が高い。他人に勝手に決められたルールとは異なり、納得した上で決まったルールだからである。家庭でルールを決める場合は、話し合いを数回重ねて子どもが納得したルールを適用していくことが効果的である。

高校生になるとそれまでの年代とは異なり、親とネットのルールについて話し合いを重ねてもその効果はなくなってくる。そのため、高校生には自分自身の問題としてスマホやネットの使い方について考えさせることが重要である。

現実世界でうまくいかない子どもがネットに逃げて現実逃避を繰り返すことでネット依存になる。スマホの問題は心の問題である。その心を大人がどう掴んであげられるかが大切である。

【第 1 分 科 会】

研究発表 1

研究テーマⅠ：基本的生活習慣と問題行動について

発表テーマ「学校生活アンケートの活用と改善から見る生徒指導について」

発表者	青森県立大間高等学校	田 中 大 基
助言者	青森県教育庁学校教育課	工 藤 資 基
司会者	青森県立大湊高等学校	館 岡 清 人
記録者	青森県立むつ工業高等学校	三 浦 啓 史

【1】研究発表

（1）本校の特色と現在の課題

大間高校は「敬愛」「自啓」「健康」を校訓とする全日制普通科高校であり、今年度は各クラス 20 名程度の 2 クラス編成で、全校生徒 123 名で活動している。下北半島北通り地域からの出身者がほとんどで大間中が最多である。そのため、地理的条件からも小～高をほぼ同じ級友関係で過ごす生徒が多いことも特色のひとつである。令和 6 年度からは創設 50 周年を迎え、全国募集を開始する。大間高校はかつて、喫煙や校内設備の破損などが多かったと聞いているが、ここ数年の生徒の状況は落ち着いており授業や部活動に精を出している。その代わり、近年問題視されていることは、「長期欠席・精神面での保健室利用者」と「SNS に関するトラブル」の 2 つが特にあげられる。全校生徒を通して言えることは生徒の状況は個々に複雑であるため原因や調査方法、対策をいかに講ずるべきかが課題である。

（2）「見える化」を実践するにあたって

生徒の実態把握のため「学校生活アンケート」を定期的に実施した。いじめや生徒の悩みなど学校生活に関する実態を調査し、指導に役立てることを目的としている。令和 4 年度は紙アンケートで年 3 回実施した。「学校生活アンケート」を用いた理想的な指導は、生徒の実態把握のため、アンケート調査を実施し、結果に基づいて担任が生徒と面談、その後面談結果を職員会議等で共有・対策を講じた上で指導に移るというものである。指導方法は、再度担任が面談を実施して指導や助言を行い、問題解決のために授業や学校行事を工夫し、全校集会や生徒指導部通信でメッセージを発信するなど様々な方法が考えられる。しかし、「学校生活アンケート」を用いた生徒の実態把握にはいくつか問題点があった。例えば、アンケートだけでは実態が表れにくいということがあり、悩みや問題行動がある生徒こそアンケートでは「問題なし」と回答するケースが多かった。やはり、基本的生活習慣の確立と問題行動の改善には、アンケート調査＋αの活動の複合的な活用が必要である。他に、教員側にもアンケートや＋αの活用に至れない問題点があった。理由は、本校教員の平均年齢が若く多くが初任校教諭か臨時講師で経験が浅いためである。今年度私が赴任した際、学校生活アンケート等の記録を探しても保存されていない場合が多く、前年度からいる教員に聞いても存在やその後の活用方法を理解していないケースがあった。やはり、個々の活動を複合的につなぎきれないことが現実的な問題としてあった。教員側の生徒理解や指導プランが不十分なままでは、生徒の基本的生活習慣の確立と問題行動の改善には至れない。これらの問題を改善するために、本年度は生徒状況の「見える化」に取り組んできた。例えば学校生活アンケートを web 実施に切り替えることで集約や共有、保存が簡単になったためアンケート調査の内容が集約、共有、保存できないという状況が改善できた。次に、アンケート調査など生徒理解のための諸々の回覧・共有を徹底した。その結果、数年ぶりに調査結果に基づいた対策を議論する特別設置委員会の開催も実現できた。また、問題行動が起こった際には、全校集会で生徒指導主任講話を行うだけでなく、同じ内容を生徒指導部通信に掲載することで、問題行動に関する注意喚起を迅速に行うことができた。さらに、養護教諭が毎日作成している「学校保健日誌」を活用することで養護教諭にしか直接言えない生徒状況の把握にも努めた。

【3】まとめ

生徒の基本的な生活習慣の確立と問題行動の未然・再発防止には、生徒理解が必要である。それは、通常の活動を十分に活用、つなぎ合わせることで対応可能なはずである。経験が十分でない教員が多いからこそ徹底的な「見える」化を実現し、職員全体で知恵を出し合い、生徒の生活環境を整えたいと考えている。

【2】質疑応答と情報交換

①アンケート調査＋αの＋αの各校の取り組みについては以下の報告があった。

- ・生徒の携帯からアンケートを入力できるようにした所、紙媒体よりも多く記入するようになったため生徒と面談するよい材料としても活用している。
- ・情報をグラフ化し全職員と情報を共有している。
- ・生徒だけでなく全職員にもアンケートをとっている。
- ・未然防止として1年に6回面談をしている。
- ・相談できる先生がいるかどうかでも違ってくる。
- ・紙媒体だと一度書き直した等がわかるため面談にも活用しやすい。

②校則の見直しについては以下の報告があった。

- ・服装頭髪検査の回数を減らしたが、そのことによって特に問題は起きてない。
- ・スカートの丈について膝丈程度に変更したが、特に問題は起きていない。
- ・制服においてジェンダーレスの面から女子生徒のスカートをスラックスにした学校は3校あり、そのうち2校は実際にスラックスを着用している女子生徒がいる。これに対して特に問題は起きていない。

【3】助言者より

私も大間高校に令和3年、4年度と勤務し過去も勤務していたため、生徒の質の変化を感じている。かつては喫煙や校内の物品破損等があったが、現在は長期欠席や保健室利用者、SNS関係のトラブル等学校内に多くの課題があると感じている。まず、大間高校の取り組みとしてアンケートだけではなく＋αの活動として学校生活アンケートのweb実施、学校保健日誌の回覧、全校集会時の講話、生徒指導部通信の発行と創意工夫をこらした取り組みが紹介されていたが、経験の浅い教員に対して徹底的な学校活動の見える化を行ったことは非常に意義がありこれからも継続していった欲しいと思っている。そこで、＋αの取り組みだが、若手教員や経験の浅い教員が多い学校は多忙化に追われるあまり、取り組みが単発で終わってしまい、成果が得られない可能性が考えられる。生徒にとって効果的なものになっているかを定期的に点検し、常に学校内でPDCAサイクルをまわし続けていくことが重要である。しかし、計画と実行はできても、それを検証し継続し続けていくことがどこの学校でも多忙化に追われるあまり余裕がなくなってくるのが原因で実行できていないことも考えられるため、そのようなサイクルを常にできるように生徒指導部主任が意識しながら取り組んで欲しい。次に、大間高校のような初任校教諭や臨時講師など若い教員が多い学校では、若手教員が他の教員に相談できず、一人で悩みを抱え込んでしまい自分で責任を感じてしまうことが考えられる。生徒指導は、学校に係わるすべての教職員が担うものであり、学校全体で取り組むことが必要であるということを職場で再認識させて欲しい。そして、生徒指導部が中心となって学校内の各学年や分掌、設置されている委員会がうまく機能するように生徒指導部主任が調整役となって学校を盛り上げていった欲しい。また、管理職のリーダーシップのもと、ミドルの先生が機能するネットワークを構築することが学校を成長させていく鍵になる。また、大間高校は非常に地域と連携しておりカフェなど多様な教育機会が多くある。今現在、昨年12月に生徒指導提要が改訂されこれまでのイメージである問題行動を、直すから生徒の成長発達を支えるという考えが強く推されてきている。それを踏まえ、大間高校にとってこの多様な教育活動機会をうまく使いながら生徒が主体的に課題に挑戦してみることや、多様な他者と共同して創意工夫することが人間的な成長を期待できることから、これからもこの活動を生かして生徒指導を推進していった欲しい。最後に、情報提供としてこの分科会で校則の話がなされたが、県内で各校の校則改訂が動き始めたのが令和3年、4年頃である。この中でトップ3としてはまず、頭髪関係で2ブロックの問題が多い。続いては、この分科会では女子のスラックスについて話があったが制服についての問題。3つ目は自動車学校の時期と校内のスマホ規定である。なお、校則については、これから令和5年度の県内の取り組みについて学校のホームページで公開をしているかなども踏まえて調査する予定である。

【第 2 分 科 会】

研究発表 2

研究テーマⅡ：いじめや学校不適応生徒の指導について

発表テーマ「本校における学校不適応生徒の状況とその対応について」

発表者	青森県立青森高等学校	成 田 康 生
助言者	青森県総合学校教育センター	根 城 亮 輔
司会者	青森県立北斗高校	佐々木 一 範
記録者	東奥学園高等学校	對 馬 慎 司

【1】研究発表

（1）学校紹介

青森高校の歴史は長く、青森県を代表する太宰治や寺山修司など数多くの著名人が卒業している。現在の学校での取り組みとしては、SSH(スーパーサイエンスハイスクール)がスタートした。部活動ではコロナの時期に少し部活動加入率が減ったものの、R5にはコロナ前の人数に戻り、インターハイや全国高総文にも出場しておりとても活発に部活動が行われている。

（2）いじめの取り組み状況

いじめ防止の取り組みとして、ホームルーム活動の一環で「命の大切さを学ぶ教室」という授業を行った。テーマとして「あなたは被害者や遺族が毎日どんな気持ちで過ごしているのか考えたことがありますか」ということを、生徒が相手の立場に立って命の大切さを考えることで、いじめの防止活動として行っている。また、学校アンケートも行い、エクササイズ&ケーススタディ形式でアサーションやリフレーミングを用いて、自分の考え方がすべてではなくて他人は他人の考え方があるということや、ネガティブな言葉も変化させて言い方を変えると不快ではない言葉に代わるなどのエクササイズを行なっている。そのことが、今どの学校も苦慮されているSNS関連のトラブルを防止できる一手になるのではないかと。最近では、アンケートも紙ベースからネットでのアンケートに変わりつつある中で、エクササイズのように行うアンケートは紙ベースでないと難しい。

（3）「いじめ」の状況報告

令和3年度から、毎年1件から2件ほどのいじめがある。一例をあげると、加害者が発達障害であり、指導してもなかなか指導が入らない状況であったが、被害者はそのような状況を理解してくれて、保護者にも学校の対応で何とか理解してもらえた事案があった。過去の話としては、卒業生が大学に入学してから周囲から相手にされなくなり自らの命を絶ってしまうケースもあったので、そうならないように、指導するときも気を付けるようにしている。

（4）学校不適応生徒の状況とその対応

令和3年から令和4年にかけて増加傾向にある。コロナ前は、そういう生徒に対しての居場所を、保健室のとなりに「健康相談室」を設け教室に入れずに利用し、養護教諭が登校記録をとって対応していた。しかし、コロナ禍になってからはそういう生徒も増え、もう一つ20名程度くらいの別室を用意し、最大10名くらい利用した時もあった。別室の中にパーテーションを設け、生徒によってはパーテーションを自分流にカスタマイズする生徒もいた。現在は2部屋の別室を使用し2名が利用している。しかし、最後は教室に戻れることを目的として利用させているので、ずっと別室にいるのではなく、教室の廊下で授業を聞いたりする生徒も中にはいる。

(5) 今後の課題

生徒が多様化しているため、個別最適な学びが求められている。しかし、そのことでホームルーム担任の負担が多くなるので、そこに対しても支援をしていかなければならないが、どのようにして支援していくのが課題である。今後は、生徒だけでなく先生方への対応も考えなければならない。

【2】質疑応答

- ・ 相談室を作ることで快適な場所になり過ぎないか？
- 登校支援（別室）のアプローチの仕方を考えるべきである。居場所づくりはあっていいと思うが、生徒の抱えているものは何かを考え、教室復帰していく目的のためであるということも伝え使うべきである。

【3】助言者より

生徒指導提要が昨年改定され、いじめの未然防止・早期発見が周知されていく中で、コロナ学年と言われている高校1年生において、人間関係づくりができない生徒が多い。こうした中で、ホームルームや発表された内容は、大いにいじめの未然防止や早期発見につながっている。また、別室も学校ごとに苦慮なされていると思われるし、その生徒を抱える先生方や担任の負担を支えることも大切になる。対処の特効薬はないので、時間をかけていろいろな先生方のサポートも得ながら各学校でこれからも指導していただきたい。

【第 3 分 科 会】

研究発表 3

研究テーマⅢ：各学校の特色ある取り組みや活動について

発表テーマ「八水クリーン大作戦」

発表者	青森県立八戸水産高等学校	大 下 光 広
助言者	青森県教育庁学校教育課	大 西 一 史
司会者	青森県立八戸工業高等学校	沼 山 隆 広
記録者	八戸聖ウルスラ学院高等学校	岩 澤 健 一

【1】研究発表

（1）はじめに

今年度創立 115 年を迎えた県内唯一の水産・海洋系高校である。これまで 1 万人を超える卒業生が世界各地で活躍している。海洋生産科、水産食品科、水産工学科の 3 学科及び漁業科、機関科の専攻科 2 学科が設置され、海のスペシャリストを養成する。全校生徒数 192 名で、近年入学志望者の激減、定員割れの状態が続いている。

（2）特色ある取り組み・活動

本校からは学校行事の一つである「八水クリーン作戦」を紹介したい。この行事は生徒会活動の一環として実施されており、新入生を迎え、全校で行う最初の学校行事である。校地内の清掃だけではなく、日頃からお世話になっている地域への感謝を込めて始められた活動も 31 年目となった。活動内容は、学校周辺地域を中心に、本校前の八戸港から魚市場周辺、蕪島付近での清掃活動を行う。目的は、学校周辺地域の清掃活動を体験し、社会奉仕の精神を養うとともに、環境問題に対する関心を高めること、八戸クリーンパートナーの一員として自覚し、市の美化に努めることである。活動時期としては、1 学期終業前に 2 ～ 3 時間程度実施している。本校には校舎の他、小型舟艇を係留している漁港、栽培漁業実習場がある。また寄宿舎や屋内潜水プールなどがあり、活動範囲は地図に示すように広範囲になっており、各クラス単位で区域を決め、実施している。

これまでは本校生徒だけの活動であったが、昨年度、近隣の中学生と合同で実施した。清掃活動を行うだけでなく、取り組みを通じて、高校や漁業への理解を深め、進路に対する目的意識の高揚と学習意欲の育成を図ることを目的とし、本校教員による出前授業も事前に行った。八戸高等支援学校とも合同清掃を行った。清掃活動を通じて特別支援教育への理解を深めることも目的としている。この時は、本校 1 年水産工学科生と高等支援学校普通科 1 年生だけでお互いグループを組んで行った。今年度は、学校運営協議会が設立された。学校にしかできないこと、学校と地域が一緒にできること、地域にしかできないことを考えながら、地域住民や保護者など学校運営の参画や地域住民からの支援・協力を促進することで学校と地域との信頼関係を深め、学校運営の改善及び生徒の健全育成を図る。学校と地域・家庭の 3 つの歯車がかみ合うことで、より一体となり未来の創り手となる子ども達の成長を支えることになるのではないかと。そして今年度は、八戸高等支援学校とともに鮫町内会の協力も得て合同清掃を実施することになった。このような取り組みにより、生徒は地域との繋がりを意識し、地域の現状を理解し、地域の一員として自覚を持ち、また未来を考えられるようになることにつながるのではないかと思います。

（3）生徒アンケート（一部抜粋）

- ・自分はもちろん他の人たちも海への不法投棄を未然に防ぐ活動・呼び掛けを学校でも行っていければと思った。
- ・釣り糸や、はさみ、空き缶、食品容器などのゴミが多く見られたが地域をきれいにできてやりがいがあった。

- ・ペットボトルや空き缶など明らかに故意に捨てているような形跡も見られ残念だった。
- ・地域の方や通りかかった人から「ありがとう」と声をかけられうれしい気持ちになった。
- ・これからは伝統ある清掃活動で拾うものが何もない状態であってほしいと思った。

（４）成果と課題

成果として、気軽にできる清掃活動により、自分たちの町をきれいにし、清掃することによりどれだけのゴミが捨てられているかを実感しゴミを生み出さない、ゴミをポイ捨てしないなどの啓発になる。直接、社会貢献できている実感を得て達成感・やりがいも感じることができる。地域住民との信頼関係を深めることができる。他校の生徒などと交流することにより、お互い違う価値観などを持っていることを認め合うことで自分自身が多様性を尊重できる人間となることへつながる、などが挙げられる。今後の課題としては、生徒数激減によりこれまでの区域で実施可能か、地域住民だけではなく保護者や他の団体・機関、民間企業等との連携強化の必要、などが考えられる。

（５）おわりに

この清掃活動は生徒指導の目的である「児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支える」ことに資する集団活動を通して、生徒指導の目的に直接迫る学習活動であるといえる。所属する集団を自分たちの力によって円滑に運営することを学ぶこと、集団生活の中でよりよい人間関係を築き、それぞれが個性や自己の能力を生かし、互いの人格を尊重しあって生きることの大切さを学ぶこと、集団としての連帯意識を高め、集団や社会の形成者としての望ましい態度や行動の在り方を学ぶことに生かされていると思う。そして家庭や地域及び関係機関等との連携・協働を密にし、生徒の健全育成という広い視野から地域全体で取り組む「社会に開かれた生徒指導」を推進していくことにもつながると感じる。また、私たちは清掃活動を通して、近年問題になっている環境問題、特に海洋環境問題を重視している。「海に学ぶ・海で学ぶ」をスローガンに日々励む生徒たちにとって、海洋汚染は重要な環境問題であることを知るきっかけになるとも思われる。この伝統ある清掃活動において拾う物が何もない状態になることを願いながら、環境美化だけにとどまらず生徒一人一人の良さや可能性が生かされ、個性の伸長が図られるように、そしてよりよい人間関係を築く力や社会の一員として望ましい態度が育まれるよう、今後も継続していきたい大切な行事である。

【２】質疑応答

- ・ 八戸工業高校 沼山：「八水クリーン作戦」は非常に広範囲において実施しているが、今後、生徒数が減ることにより、これまで通りに実施できるのか、区域を減らすのか、中学校や特別支援学校の生徒、地域の方々といっしょにやるなど人を増やして実施するのか、学校でどのような話し合いが行われているか教えていただきたい。
- まだ具体的には話し合いは行われていないが、コミュニティスクールを導入しているので、地域の住民の方や近隣の小学校、中学校にも声をかけて全体で取り組んでいければと思う。広い範囲をカバーするのは非常に大変であるため、今後、生徒会主体に考えていかなければならない。

【３】助言者より

生徒指導提要が改訂され、子どもたちの発達を支える、支援するというのが、メインに打ち出され、先手の対応でプロアクティブな生徒指導を心がけることが示されている。課題未然防止教育や発達支持的生徒指導が大事であり、発達支持的生徒指導が大きな土台となるが、それは日常でのあいさつやそれぞれの生徒との関わり、日常の接しの場面で生まれる。また日常の授業が一番大事で、自己存在感や共感的な人間関係、自己決定の場の設定、安全安心な風土づくりなどが改訂に当たって示されている。発表を聞き、このような特別活動は未然防止の土台となって後々生きてくる活動であると捉えている。

今の高校１年生の生徒は、中学校でほとんど活動が止まって３年間を過ごしてきた子たちである。学校から足が遠のくような傾向があったり、大きな大会や学校行事が縮小の形で行われ、その３年間で学ぶべきことが不足したり、そのような影響が高校で出ているのではないかと心配している。小学校、中学校、高校それぞれで身につけるべき資質があると思う。ただ、コロナの影響でどうしてもうまくいかなかったということはあると思うので、このような特別活動、学校行事での活動の中で学べるということは大きな

ことである。

「八水クリーン作戦」は、学校生活を豊かな充実したものにするための体験的活動に合致している。そして、全校、学年での活動で、同じ学校の生徒はもちろん、中学生、高等支援学校、地域の方々など様々な方と交流し、その集団で人間関係を学ぶことができる非常に大きな活動である。また、多彩な内容を含んだ総合的、創造的な教育活動であり、子どもを支える本当に大きなものである。そのような観点で、八戸水産高校の発表は素晴らしい取り組みだと感じる。しかも31回目ということで、今後どのような形で進んでいくのか非常に楽しみである。今年、コミュニティスクールが設立されたということで、この学校行事等に関して、「地域」という言葉がキーワードとして外せないと感じている。地域と関わりながら社会性が身についていく活動として、今後とも進めていってほしい。また、生徒アンケートから、子どもたち一人一人がそれぞれ感じたことや自分で思ったことから課題が見つかり、色々なことを考え、発展させて次の実践につなげていけるのではないかと感じた。

このような活動を通して、子どもたちがもっともっと成長して社会に出て行くことになると思うので、今後とも各学校で生徒の実情等を踏まえながら活動を進めていただければと思う。

部 会 の 動 き

令和5年 5月18日（木）高教研事務局長会議
「青森県総合社会教育センター」

5月30日（火）第1回役員会
青森北高校 会議室

- ・令和4年度 事業報告・決算報告
- ・役員改選
- ・規約審議
- ・令和5年度 事業計画(案)・予算(案) 審議
- ・令和5年度県高教研生徒指導部会研究大会について
- ・学校安全指導者養成研修への派遣計画について
- ・第76回県高校総体期間中の生徒指導について
- ・各地区情報交換

8月29日（火）第2回役員会
青森県総合社会教育センター 第6研修室

- ・令和5年度県高教研生徒指導部会研究大会進捗状況について
- ・令和6年度県高教研生徒指導部会研究大会開催時期と開催事務局の確認について
- ・各地区情報交換

9月 5日（火）令和5年度青森県高等学校教育研究会生徒指導部会研究大会
弘前市「弘前パークホテル」

令和6年 1月30日（火）第3回役員会
青森県総合社会教育センター 第6研修室

- ・令和5年度県高教研生徒指導部会研究大会の反省
- ・令和6年度県高教研生徒指導部会研究大会について
- ・学校安全指導者養成研修への派遣計画について
- ・令和5年度高教研生徒指導部会収支報告
- ・各地区情報交換

研 究 テ ー マ

紀 要 (集)	年 度	研 究 テ ー マ	会 場	会 員 数	大 会 参 加 者 数	大 会 発 表 者 数
57	24	第1分科会…「情報化（携帯電話とインターネット）と問題行動」 第2分科会…「不登校生徒の対応」 第3分科会…「本校の交通安全の取り組みについて」 第4分科会…「ホームルーム活動・部活動を通して行う生徒指導」	富士屋 グランドホール	119	82	4
58	25	第1分科会…「基本的生活習慣と問題行動について」 第2分科会…「いじめ・暴力行為等の問題について」 第3分科会…「交通安全指導について」 第4分科会…「ホームルーム活動・生徒会・部活動・ボランティア活動等について」	アップルパレス 青森	189	115	4
59	26	第1分科会…「基本的生活習慣と問題行動について」 第2分科会…「いじめ・暴力行為等の問題について」 第3分科会…「交通安全指導について」 第4分科会…「ホームルーム活動・生徒会・部活動・ボランティア活動等について」	八戸 プラザホテル	231	148	4
60	27	第1分科会…「情報化と問題行動について」 第2分科会…「学校不適応生徒の指導について」 第3分科会…「保健指導について」 第4分科会…「ホームルーム活動・生徒会・部活動・ボランティア活動等について」	ホテルサンルート 五所川原	230	130	4
61	28	第1分科会…「基本的生活習慣と問題行動について」 第2分科会…「学校不適応生徒の指導について」 第3分科会…「交通安全指導について」 第4分科会…「ホームルーム活動・生徒会・部活動・ボランティア活動等について」	弘前パークホテル	254	116	4
62	29	第1分科会…「基本的生活習慣と問題行動について」 第2分科会…「いじめ・暴力行為等の問題について」 第3分科会…「保健指導について」 第4分科会…「ホームルーム活動・生徒会・部活動・ボランティア活動等について」	むつグランドホテル	259	110	4
63	30	第1分科会…「基本的生活習慣と問題行動について」 第2分科会…「いじめ・暴力行為等の問題について」 第3分科会…「交通安全について」 第4分科会…「生徒会活動について」	アップルパレス青森	255	112	4
64	元	第1分科会…「基本的生活習慣と問題行動について」 第2分科会…「本校の不登校生徒に対する学校全体での取り組みについて」 第3分科会…「部活動の再編について」	八戸プラザホテル	250	127	3
66	4	第1分科会…「基本的生活習慣と問題行動について」 第2分科会…「いじめや学校不適応生徒への指導について」 第3分科会…「各学校の特色ある取り組みや活動について」	サンルートホテル 五所川原	199	100	3
67	5	第1分科会…「基本的生活習慣と問題行動について」 第2分科会…「いじめや学校不適応生徒への指導について」 第3分科会…「各学校の特色ある取り組みや活動について」	弘前パークホテル	169	106	3